

弔 辞

本日、学校法人熊本学園前理事長 岩野茂道先生の葬儀に参列し、謹んで哀悼の意を表します。先生のご永眠を悼み、あわせて学園における損失があまりにも多いことを深く惜しむものであります。岩野先生がご逝去されたことは、全く突然のことであり、訃報に耳を疑いました。この様に、突然に他界されようとは、今も信じられないことであります。

顧みますと岩野先生は、昭和三十八年に九州大学経済学部助手から熊本商科大学へ講師として赴任されました。以来、経済学部長等の要職を歴任した後、昭和六十三年から平成八年まで学長、平成二十二年から二十七年まで理事長をお務めになられました。

在りし日の岩野先生は、大学と学園の舵取りを掌る責任から、職務においては自他共に厳しくあられた一面、他方では、分け隔てなく誰にでも優しく接しておられました。

学長時代のご功績で最も大きいことは、平成六年の外国語学部、社会福祉学部の二学部設置、同時に熊本商科大学の熊本学園大学への名称変更でありました。当時の学部申請は現在のよう
な自由化がなされておらず、その業務は苛烈かれつを極めました。当時、私も総務部長として陣頭指揮を執った平成四年・五年の二カ年に亘った文部省への認可申請は、全学を挙げての総力戦であり、連日、申請書類の作成が深夜に及ぶことも珍しくありませんでした。二年間で数回に及んだ書類提出に際しては、朝一便の飛行機で上京して文部省へ提出するという一刻を争うような状況の中で、共に当日の早朝まで夜通し、当時の総務課で岩野先生が手書きされた原稿を清書しながら趣意書を作成したことを思い出します。総務課の職員から「先生、もうこれ以上修正したら、間に合いません！」と言われるまで、職員と一緒に真剣に申請に打ち込まれたお姿が眼に焼きついています。一旦、風呂敷に包んだ、山のような申請書類を両手に提さげて上京すれば、文部省に命じられた修正書類を、三度、四度と翌日、訂正して持参するため、一週間は熊本へ帰ることは叶わず、大学から交代要員が次々に送り込まれてくるのと入れ替わりに、東京虎ノ門から、熊本の地で経過を見守る岩野先生に時々刻々報告を入れておりました。平成二十二年からは、学校法人熊本学園の財政再建を任されて、理事長の任に就かれ、財政健全化三ヶ年計画を断行、教職員共々、身を切る改革を実践され、現在の学園の安定を築かれました。

職務への真摯で厳しい姿勢の反面、プライベートでは、ご自宅に家庭菜園を作って、野菜作りを楽しまれる由、語られるときの笑顔が忘れられません。

また、岩野先生との想い出を辿ると、紅灯緑酒こうとうりよくしゅ、仕事を終えてからのひと時には、いつもご一緒して、凜やダックなど、馴染みの店で大好きな日本酒やワインを嗜たしなんだ後は、カラオケで十八番の「坊がつる讃歌」を歌う姿が昨日の事のように脳裏に浮かんでまいります。岩野先生と過ごした日々は長く、思いは尽きません。

岩野先生は、その功績により、令和元年の叙勲により、旭日中綬章を受章されました。私自身、昭和四十二年に熊本商科大学に奉職して以来、長きに亘り岩野先生とは、共に力を合わせ、大学・学園の発展に力を尽くしてまいりました。そのあなたも今は幽明境ゆうめいさかいを異にしてしまいました。全く痛恨の情に耐えません。故人が慈しむように育てられたこの学校法人熊本学園を、さらに飛躍、発展させることをお誓い申し上げ、御霊みたまの安らかならんことを祈り、生前のご尽力に対し、深い感謝の心をささげて弔辞といたします。

令和二年八月二十七日